

練馬区小中一貫教育資料作成委員会（第12回）「キャリア教育の推進」部会 要点録

開催日時	平成22年7月1日(木) 午後3時14分～午後5時33分	
会場	練馬区役所東庁舎4階 401会議室	
出席者	委員	廣嶋憲一郎、石井友行、小野雅保、世古徳浩、安井実、望月徳生、根本裕美、飯塚剛、高橋吉久（敬称略）
	その他	教育出版
	事務局	五十嵐浩子 統括指導主事、鈴木裕行 指導主事

1 挨拶

事務局

ただ今より今年度第4回、通算で12回になるキャリア教育の推進部会を始める。本日は各委員の事例の提案について検討する。

2 協議

事務局

本日、小野校長先生、望月先生、高橋先生から資料をご用意いただいた。それぞれ説明いただきながら今年度の原稿につなげていきたい。

部長

久々にワープロで文章を打ったが、まだ作成中なので少し見逃してもらいたい。写真が120枚ぐらいあるので持ってきた。今年は上小が区の道徳の奨励校の発表校にぶつかっているのが1回だが、去年、一昨年までは初夏に1回、冬に1回の2回やっていた。

今回のこれは中学2年生が全員、隣の小学校の1年生から6年生に行ったりリトルティーチャーの指導計画で、中学校では総合的な学習の時間にカウントして約10時間で行っている。大きく言うと、小学生に中学生へのあこがれや期待を持たせるとともに、自己有用感や自信が得られるような場をしたい。それから学習をサポートするので、自分自身の学習の仕方や活動を振り返って意欲を高める、この二つをねらいとしてここ数年間やっている。

実は、今回、本当の指導計画は写真の左側に書いてある。2年生の総合担当の音楽の先生が詳細を作った。リトルティーチャーの本番は6月25日金曜日で、仕込みを始めたのはおおむね5月の連休明けである。

まず、初めに中学2年の先生と小学校の全学年の担当の先生が打ち合わせをし、それを受けて今度は子どもたちに学年集会で「2回目のリトルティーチャーはこういうことをやるよ」と説明をした。2回目というのは、この子たちが1年の1月か2月に一回やっていて、今回が二回目になるからである。

どの学年がいいか、どの教科がいいか、希望調査で第1、第2、第3希望をとる。実は体育が圧倒的に多い。体育ばかり行ってしまうと厳しいので、第2希望に回すこともある。そして、その翌週にまた時間をとって説明をする。既に割り振りが終わっているのは僕は図工だな、私は家庭科のボタン付けだなと分かる。先生方は全員関わるので職員会議で周知をし、6月上旬

には上中の2年生、百数十人がみんな隣の小学校に行き、学年の教室で大体20人ぐらいつに分かれて、学年の先生とこんなことをやるんだよと、いわゆる指導の流れの打合せをする。

6月11日と14日は準備をしたり笛の練習をしたり、図工で物をつくる場合はどうやってつくるか、英語の場合はどんなカードを作るかとか、担当の2年の先生を中心にやっていく。21日の5時間目に学校で模擬授業をし、そして23日の模擬授業で仕上げをする。本番は全員連れて体育館に行き、始めますとあいさつして5時間目が始まる。リトルティーチャーはそんな感じで進む。終わってから、まとめ、反省をする。うちはこれを大体70時間ある中学2年生の総合的な学習の時間の中の10時間ぐらいで、自分なりに課題をまとめてやるという位置づけにしている。

どこが何をやっているかはB4判資料の「2 指導計画（中学生第2学年全員）」のタイトルの下に小さく書かれている。1年は国語である。中学2年生の男の子、女の子にインタビューをして何が好きかを聞き、「〇〇が好きです」「〇〇先生はイチゴが好きだと言いました」のように書き方帳などに書く。

2年は図工は、動くおもちゃをつくる活動である。それから3年は音楽でリコーダーの練習をし、最後は中学生と一緒に合奏をする。4年の総合の英語はこの写真の一番下の左で、これはもう終わるところだが、カードを書いてちょっとした構文を勉強した。

それから5年の家庭科は真ん中の右側の写真で、ボタン付けである。これは45分あると結構できるようになる。3～4人を中学生が必死になって手取り足取り手助けして「できたできた」と達成感がある。そして6年生は体育を体育館の中でやった。

実は指導案が全部で6種類ある。今日は3種類しか持ってきていないが、平成20年に上小と上中の連携でやった時の研究発表会でこの指導案の略案を作ったので、それを土台に少し調整しながら指導案のパターンを毎年6種類、年に2回常につけていて、中学生はこのコピーを見ながら授業に参加する。昔は家庭科で調理をやったりした。

裏面は「リコーダーとなかよく」の流れや図工などである。ここまでできていると、中学の図工の先生や音楽の先生もだいぶ分かるようである。ある程度もう完成形に近いので、一種の行事になっている。

ここはちょっとまとめていないが、B4の左側の「3 本事例の小中一貫校における効果」については、中学生にとっては「やさしさやいたわりが強まり自信が得られる」、小学生にとっても「期待がふくらむとともに中学生が身近に感じられる」あるいは「多くの人から支援してもらえて理解が深まる」などとした。ここはかっこ付きだが、小中の教員にとってはやはり「お互いの生活や、魅力ある教材・教具について学び合える」という効果がある。

4番の「児童・生徒の声から」では、小学生がお姉さんに褒められて喜ぶなど、言葉かけをかなり一生懸命やっている。私もまず始める前に体育館で中学生全員に、とにかく45分間、顔を引きつらせず笑顔で常にやりなさいと言っている。笑顔をなくしてしまうと怖いお兄ちゃん、お姉ちゃんになってしまうから、とにかくスマイルだと言っている。あとは褒めるなり何なり、小学生に言葉をたくさんかけてくれと、その二つを約束している。終わるとほっとして、引きつった笑顔が普通のスマイルになり「ああ、やったー」、その繰り返しである。

事務局

小野校長先生、これは今年度の原稿のスタイルに近い形でまとめていただいたので、前回の

協議も踏まえていろいろ質問や意見をいただけたらと思う。委員長自らの提案ということで、石井校長先生に進行のほうをお願いしたい。

アドバイザー

歴史を刻んでいるし、それから一貫校における効果もきちんと出せているので、これは広げていく価値がある。

部長

実際には既にまとまっていたものがあつた。岡田先生が立ち上げたもので、私は小中のこういうのは初めてなので最初は何だろうかと思った。

委員

先ほどの雑談の中で、小野先生が、保護者に向けてこれのスライドショーをやると言っていた。保護者は小中一貫の中身が見えていない部分がたくさんあるので、これを情報発信の一つとするのはすごく大事な視点だと思う。

部長

確かに上小は保護者参観の日にぶつけている。去年の冬は後ろにお母さんたちがいて、盛り上がりみんなで拍手をしていた。また、今年は中学の役員が見にきた。そこで、家では見せないような笑顔や表情を初めて見たと言っていた。

委員

小学校の縦割りの活動でも、やんちゃな高学年が1、2年生の前ではやわらかい顔になるというのはよくある。

部長

お母さんもそれにびっくりしてしまい、お姉ちゃんが「私、今回はできたよ」などと大きな声でニコニコして帰ってきたのがすごく印象的だったと言っていた。演じることの楽しさのようなものかもしれない。ただ、小中一貫になると毎日接するので、それが慣れになるのか。

委員

小中一貫といっても小学校の1から6を考えれば、日常的に交流する場面はそれほどないのではないか。

委員

まずないと思う。登下校で同じ道を通るようになるから、顔は見ている程度だと思う。リトルティーチャーで先輩たちが自分のところにくる。それから私が担当した部活動の体験と一緒にやっている。それで「あ、こういう人だったんだ。ちょっと怖そうだったけど優しいな」となる。そういう意味で交流はどんどん深まっていく気がする。

部長

確かに小学生も、またお兄ちゃんが来ると待ちに待っているような場面もある。小学校でも、いつも騒がしくてしょうがないあの子がすごく生き生きとやっているという声も聞く。ちょっと非日常的な活動なので、ある種そういう期待感があるかもしれない。

委員

実際に、この6月に運動会があり、小中一貫だから6年生と8年生が組体操をすると前回紹介したが、一緒に練習している時の2年生の顔つきがまるつきり違う。痛くても痛いと言わない。「整列」と言うとピシッと並んで、何も言わないのに「失礼します」と座り始める。そうすると向こうに戻った6年生が「整列」と言うとピシッと並んで「失礼します」というようになる。来て学んでいく。そういうわれわれの想像し得ない、計りしれない刺激や働きかけがある。

部長

実は岡田校長先生は、まだいろいろとやっているが、これが意外に残っている。普通、研究というのは、研究が終わるとなくなるものだが、ずっと続いている。何か魅力があるのかと思う。

アドバイザー

何か普段想定できないコミュニケーション、人間同士の触れ合いの副産物のような気がする。この前、品川の小中一貫教育校を退職した校長と話をした。彼は品川の政策を非常に高く評価していたが、小中一貫教育は何がそんなに魅力だったのかと言ったら、中学生が全然違うと。小学校でも多分プラスになっているはずだが、とにかく学校がすごく落ち着き、中学生の心が発達して小学生に対してすごく優しくなったという。

今までの中学校は幅が3年間だから近い世代だけの付き合いであった。それが今度3倍、9年間の付き合いになる。そこが大きかったのではないかと彼は言っていた。

多分、落ち着きとか心の安定のようなもの、決められた大して年齢差のない小さな集団の中での切磋琢磨とはまた違った付き合い方とか、先生がいま言った、言わなくてもきちっと整列するというのも、中学校1年生と3年生がやっても仲間内のようなものだからまあいいやみたいになるが、自分たちが違う世代に憧れの目で見られていると思うときちんとやらなければならぬ。教師に言われるよりはるかに効果があるのではないか。本来、それが教育かと思う。

その辺がアピールできればいいと思うので、これはなんとかきちっと整理して事例として出したい。

部長

あまり苦勞しなくても研究成果の情報があるので、切り貼りしてある程度妥当なところだけでも出せればと思う。今までは1校だけのマイナーな取り組みだったが、練馬の作成資料の中に入れるのであれば、アピールする場が広がってくるかと思う。

アドバイザー

コミュニケーションや人間理解を強調すればいいと思う。その辺はキャリア教育のねらいと

びたっと合う。

委員

鈴木先生、今日のゴールラインはどういうところに設定し、各事例をどのように扱うのか。前回欠席したのでその辺が見えずにいま戸惑っている。今すばらしい提案をしていただき、実践事例もいろいろ出ているので、その辺の見通しを立てたいのだが。

事務局

前は根本先生の提案をたたき台に内容の項目などを確認し、4ページから6ページをめどにそれぞれ事例を作っていこうということで話がまとまっている。小野校長先生に出していただいたこれは原稿になる形でまとまっているので、前回の確認と合わせてこの流れでいいかどうかの確認が取れば、具体的な原稿作成に入っていける。

あともう一つリトルティーチャーに関しては、だれが主担当になって文章化していくのかの確認も必要かと思う。

部長

前回、根本先生の提案をたたき台に、① I期における事例、② 実施学年・指導時数、1年1学期の20時間で「がっこうだいすき！」をやり、③ねらいが入る。④本事例とキャリア教育との関連と出ていたが、今回は小中連携のほうがいぶ強くなるという話があった。そして⑤の「本事例の小中一貫教育校における効果」を五十嵐統括の方ではかの部会にも提言、調整していただくという話も出ていた。それを受けて、今回私はキャリア教育との関係はぼささり切った。指導計画のすぐ下に小中一貫校の、あるいは連携校の効果を分かりやすく入れた方がいいかなとそこに落としてみた。

ここは、小にとってと中にとっての両方があり、おまけに教員も入れたがこの構造はまた考えなければいけない。それから、根本先生の一番終わりに「事例に見られた児童の姿」があった。次のページの裏面にあるが、その児童の姿あたりに、もしページ数があれば写真と児童・生徒の声とうまく組み合わせると効果が出ると思う。

あと次のページの資料だが、「ともだちいっぱい！がっこうだいすき！」のほうは「なかよしいっぱいカード」「みつけたよカード」「ちがうよカード」「すてきカード」など、ちょっとページ数が出るかなと思った。実は子どもはこの指導案を見ながら授業構成をするので、体育の指導案などは、先生が何かやる時に子どもたちに使えるかなと思う。だからこれも資料に落とすか、それとも本時の事例の概要にしたほうがいいのか、そこは考えずに来た。

アドバイザー

子どもの姿は載せるのか、要らないと言っていなかったか。

事務局

期待される効果という形で載せる。

アドバイザー

要するに、メインは指導計画と単元のあらましで、どういうふうにとやたらいかある程度計画がないといけない。それと、ワークシートや資料など、それを見るとイメージがわき、そのまま使ってもらえるようなものをメインにしようかと話した。児童の姿というよりも、例えば資料の中に写真を入れてそれを動機づけにする。ある学校ではこういうことをやっていたよと子どもに見せた時に、じゃあ僕たちもできるなとイメージがわく。資料として授業の写真などを入れられないか。

委員

例えば、事例に見られる児童の姿と、一貫校における効果は似ていますよね。

アドバイザー

重なるので今回は児童の姿は要らないだろうという話だった。

委員

一貫校における効果は要するに売りだから、本当に大事なところである。だからこれをやるとこんな姿が出てくると効果が分かるようにする。

アドバイザー

やっていないところにやってもらうのだから、要するに一貫校で期待される効果である。

表現を「事例の概要」にするか、あるいは「指導計画」にするかはともかく、要するに見てなるほどこうすればいいのかとやってもらえることを重視する。ものによっては資料にワークシートなどを入れたほうがやりやすい。写真を使ってイメージしてもらうのもいいと思う。

アドバイザー

僕は、例えばリトルティーチャーは何となく算数のイメージがあったが、今日の写真を見て学年別にいろいろなところできるとすごくイメージが膨らんだ。今日、小野先生が資料で持ってきてくれた右側の6枚の写真を載せるかどうかはともかくとして、それぞれ学年1枚ずつ、1年生は何、2年生は何と6学年分載せて1ページにすれば、それでこんなにいろいろな教科でできるのだなとイメージがわく。写真がふさわしくなければイラストでいいと思う。

事務局

方針としてイラストにしていくという確認でよいか。

アドバイザー

そうすると、1ページ目はこの根本さんスタイルに置き換えられる。先ほどのキャリア教育との関係については、人間理解とかコミュニケーション能力などを書き込めばいい。保護者の声など含めて先生原稿に出ている辺りで、小学生にとっての効果、中学生にとっての効果、それから保護者の期待にどの程度応えられるかを入れられればかなり書ける。そして、次の2ページ目に事例の概要、要するに指導計画にあたるものを出す。これは教科をいくつも入れる

か、それとも先生が作られた路線でいくか。

部長

まだ時間数を入れていないが、この内容を凝縮して2の指導計画に入れてしまえばいい。

アドバイザー

それでいいのではないか。中学校から見れば総合的な学習の時間としてとらえる。そうするとここの効果などが書いてある部分は先に書いてしまう。指導計画の部分だからねらいをもっと先に出す。やはり全教科載せるか。

部長

ペーパーがあってチョイスするのであれば、6教科入れたほうが分かりやすいかもしれない。でもそのペーパーがもらえるかどうか。

アドバイザー

やはり本事案と2種類要る。先生が今日作ってきた教科ごとのはいわゆる本事案ですよ。

部長

そう。

アドバイザー

準備など含めて事前にどういうことをやったか、総合的な学習の時間としてどう計画、実践してきたかという全体像の両方が要る。本事案のほうは何ページでやれという範囲で、例えば2ページしかとれなければ2教科でいいし、1ページなら1教科選べばいい。そして、資料として写真のページ。そうするとワークシートは要らないか。

部長

ワークシートに入れるとしたら、ここで使っている図工の教材の教具そのものとか、あるいは英語で使っているカードなどか。ただそれは写真で見せることになる。物自体は小学生が持って行ってしまっている。これはたいてい小学校では全校体制になる。あるいは、5、6年生はいいというのであれば1～4年の低学年、中学年と中学生がやる可能性もある。その時にどういう形で子どもたちを動かすのかとなると、この指導案は普通の指導案と違うので、その中の学習活動の流れや中学生の動きなどが役に立つ気がする。本当はこの指導案の隙間に2×2ぐらいの写真か何かが入れられればいいが。

アドバイザー

指導案の中に作業用のシートや写真などが入れれば写真のページは要らないかもしれない。

そうすると例えば1ページ目は能書きを書き、2ページ目は総合的な学習の時間としての指導計画を10時間分なら10時間分書く。そうするとあとの4ページは資料で、その資料が指導案になる。四つ指導案を載せ、その中に写真や作業シートみたいなものがあれば入れる。もち

ろん写真が不適切であればイラストに直してもらおう。そうすれば四つは載りますよね。

事務局

これは総合的な学習の時間の事例になるので中学生の学びですよ。例えば最後に事後学習・まとめ・反省があるので、そのページを1枚資料にしたほうがよいのではないかと。

部長

「振り返り用紙」ですね。

アドバイザー

線を引いて「そこに書いてください」で終わりですよ。

一番分かっているので原稿の執筆も全部、小野先生に任せればよいのではないかと。マックス6ページ、8ページではまずいか。

事務局

ほかの事例とのバランス、量的な関係が整理できればできるかもしれない。

アドバイザー

ほかの事例は全部カットしてもこの事例を最重点にするぐらいの感じでもよいかもしれない。要するにこれだけは、一貫校はもちろんだが一貫校でないところも練馬区の学校にはぜひやってほしい、そのぐらいのメッセージを送ってもいい気がする。

委員

うちも豊中と連携を図っているが、中学校の先生方が小学生に何を教えたらいいかをいま探っているところなので、このようなアイデアがあれば使える。組体操を教えてくださいませんか、家庭科のボタン付けでちょっと来てもらえたらとか、すごくよいヒントになる。

アドバイザー

今日これだけ具体的な写真を見せてもらったので、なんとなくそういうイメージがわいたのだと思う。あまりページ数のことを言っても仕方ないので、とりあえず6ページで整理してもらい、五十嵐先生がそういうことなら8ページでもいいと言ってくれたら増やせばいい。

部長

では8月までに執筆する。

アドバイザー

キャリア教育といってもそんなに難しく考えることはない。ねらいには職業観などだけでなく、もっと基本的な人間理解の部分も入っているので、かかわりやコミュニケーション、人間理解のところをベースにそれを大事にしてやっていけば、事例はいくらでも出てくる。あとはイメージがわくかどうかである。

部長

確認だが「本事例とキャリア教育との関連」は残すのか。

事務局

これは確か前回の中間報告書でのキャリア教育からの大きなメッセージだった。ほかの部会にも伝えてある。

部長

実は作成資料はキャリア教育としてではなく、小中一貫あるいは連携として作るわけで、キャリア教育の事例などははっきり言って1年から9年まで、いろいろなところを横割りにすればなんとでもできる。要するに問題は小中一貫でなければならない、あるいは効果が上がらないようなものを見つけるという視点と、この事例とキャリア教育との関連に少しずれが出てきたのだと思う。

今までの今までのでいいのだが、この中では必然性があるかどうかは問われていない。今回いろいろ作っていただき出てきたものは、小中一貫で十分効果が出てくる。その視点が薄まらない形でキャリア教育との関係を書くにはどうすればいいか、意外と分からない。

もっと言うと、本事例の小中一貫教育において期待される効果をキャリア教育の視点から論ずるのならばできる。でもそれとは別に本事例とキャリア教育との関連は書きにくい。

アドバイザー

重なるかもしれない。

部長

ある程度さらっと書くのであれば書けるが。

アドバイザー

効果は丁寧に書いてもらいたいですが、キャリア教育との関係は、例えばこの冊子に出ている自己肯定感とか、あるいは人間関係形成力などにさらっと触れるぐらいでいいと思う。

事務局

キャリア教育との関連や位置づけのところは学校の解釈、判断によって微妙に変わってくるので、そんなに厳密に論じなくてもいいと思う。

アドバイザー

例えば、これを望ましい職業観・勤労観まで持っていくのはちょっと難しいので、そこまでは触れなくてもいいのではないかな。要するに、去年作った冊子の中から関係しそうなところをちょっと抜き出して書くぐらいでいい。勤労観・職業観の辺りは職場体験のところでも全面展開すればいいと思う。

委員

4番の本事例とキャリア教育の関連を事例ごとに載せるのは負担が大きいのではないかと前に出して大きな表の前後に入れ、そして事例1、事例2、事例3、…はこういう関係がありますと整理したほうがいい。例えば、今の小野先生のリトルティーチャーも小中一貫で語ってしまうと、現実には8年生が1～4年生にとまりますよね。8年生が5～7年生という感覚ではないですよ。

事務局

これはⅢ期の事例だから。

委員

主にⅢ期がⅠ期にですよ。Ⅲ期がⅡ期にというと、例えば桜で4年生が終わった段階で校舎を移そうとしているのと合わない例になってしまう。

事務局

桜小中をイメージするとそうなるが、ただ中学生相当ではないという事例ですよ。

委員

指導案を作る段階で、どこから45分でどこから50分なのか全くイメージできない。中学生が50分で小学生が45分の今の区切りでいいのか。

委員

Ⅱ期は50分。

委員

そうすると、例えば5、6年生向けに作っている指導案は現実に45分でやっていて、そういう調整も必要になってくる。

アドバイザー

それとも5、6年生ははずすか。

委員

事例を出すのは1～4だけにすると、5の期待される一貫校における効果は書きやすくなる。

アドバイザー

1～4と8年生のかかわりにするか。

委員

5、6、7年生まで入ってくると、多分この文章はあいまいになる。

アドバイザー

逆に、いま一貫校でないところがほとんどなので、そこからヒントを得て5、6年生もやりたいとなればやってもらう分にはかまわない。

委員

それは通常の小中連携で応用が効く。

アドバイザー

こちらで出す資料は、スペース的にも6ページなら8年生と1～4ぐらいがちょうどいいかもしれない。問題は安井先生が言った、キャリア教育との関連を取り出して別を書くか、それともそれぞれの中に入れるかである。担当者にそれぞれ書いてもらえばいいので、中に入れたほうがやりやすい。そこだけ抜き出すとそれを誰かがまとめることになる。また石井先生が苦労するのではないかと思う。

委員

要するにキャリア教育との関連が扉のようになっていて、キャリア部会ではこういう視点で6あるいは8事例出すのだと。

アドバイザー

それでいいのか。

事務局

最終的には最初にお示したマトリックスがおそらくそのような形になっていく。

部長

本事例とキャリア教育の関係はある程度トーンを同じにしておかないとバラバラになる。一人ひとり、ある人はこういう感じで、ある人はこういう文体で、ある人はこの視点で書くとなると読みにくい。キャリア部会の最初の見開きにいわゆる資料のあらましということで、こういうキャリア教育の視点で小中一貫教育の事例を集めている。それぞれ簡単なキャリア教育との関係は下記の表にまとめてある。詳細についてはそれぞれ具体的な事例を見てくださるといった方が分かりやすい。

事務局

そうすると、例えば一番右端の文科省が出している「将来設計能力」などが今回は微妙に内側に入ってきて、関連するという形でまとめていくのか。

部長

仮にリトルティーチャーならば、ここに出ている四つの柱の中のコミュニケーションや、望ましい人間関係を育む事例の一つとしてここで示す。「望ましい人間関係」と翻訳しているが、実は人間関係形成能力を高める一つの事例である。でも小中一貫がだんだん薄くなってしまふ。

委員

あともう一つ思うのは、私自身、桜小中の中にいますが、その連絡会等でいくつか柱が出てきていて、キャリアの部分は一つの大きな柱になりつつある。そうした時に、これは小学校の先生にも聞いてみないとならないが、私としては小学校にとってキャリア教育は藪から棒のようなイメージがある。小学校のキャリアって何だと。一方、中学校でキャリアと言うとすぐに職業になってしまう。今も桜小中で連絡会をやっているが、出てくる案は職業講話、それから職業体験・職場訪問、すぐそっちに走っていく。そういう発言が出てきているが、ちょっと待てよと。やはりキャリアの第一歩には自分を磨き、自分が必要であると認めていくことがあるはずだ。そうすると別に職業にこだわる必要はないだろうと。それから、いま小学校の1年から4年までというのが出たが、子どもたちは4年ぐらいで座ってられる、話を聞いてられる、約束を守れるようになる。

委員

要するに社会性を身につけるといふことか。

委員

そう。親の愛にしる父親の厳しさにしろ、そういうものすべてひっくるめて本当に人間らしく育ててくる。その部分はすごく大きいと思うので、そこがキャリアの視点の一つではないかと最近思うようになった。この一覧表を出すことによって、キャリア部会がどういう方向が小中一貫あるいは小中連携の中でのキャリアなのだと一つモデルを示すことはすごく大きいと思う。それによって小学校では「自分たちの実践のこれがキャリアの部分だったんだ」、中学校では「何も職場や職業のことがキャリアではないんだ」と目を見開かせるのではないかと。

委員

前回欠席して資料を頂いたが、その中に各校のキャリア教育の全体計画が全校分入っていた。その計画がどれだけ指導計画の中に反映されているかはちょっと分からないが、指導計画の中のこういうところなのだという共通項で言えば、やはり最後の四つの力でしょうか。

いま具体的にどうしたらいいかプランはないが、この事例はこれにつながるのだ、これを育てる学習なんだというところを簡単でもいいので押え、さらにその次の小中一貫校における効果につなげていければいいと思う。われわれの部会の情報発信としては、それを意識して指導できるのは大きいと思う。

迷った時は原点に戻るといふことで、この資料を見る人がこの資料から何を心得、どう活用するかである。まずこれをパッと見た時に、こういう効果があつて指導計画がこうで、これをやればこんな力が育つんだ、キャリア教育のこれにつながっていくんだと分かれば大きなものになる。

4ページから6ページの中でわれわれとしては言いたいことがいっぱいあるが、いかに情報を捨てるかがすごく大事だと思う。

委員

今の石井先生の発想からすると、自分たちが考えている自己肯定感や自立心の項目を全面に出して、片や勤労観や職業観の柱が2本ベースにある。そうすると事例の並べ方も自己肯定感と自立心の事例を前半に、勤労観や職業観の事例を後半に持ってくるようにセッティングにすれば形にはなる。

そうすると、例えば高橋先生がやっているものはむしろ自己肯定感・自立心の例である。ただ現在は事例3に入っている。小野先生のリトルティーチャーもどちらかというところだが、いま事例7ぐらいに入る感じで討論されている。だから事例を並べ替えて柱をもっと大きくし、重視して指導する項目を2本立ての柱にして考えていけばいいのではないか。そうすると根本先生はいつも事例1になっているが、これは低学年の勤労観のⅠ期になる。

今はなんとなくⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期の順番で並び、特別支援が後半になっている状態だが、特別支援もきちんと見直して、事例の順番をきちんと分けして、あくまでも自己肯定感・自立心の事例1というように並び替えたほうがいいのではないか。

部長

Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期でいわゆるキャッチフレーズを作った。Ⅰ期は「好きなことを見付けよう」Ⅱ期は「夢から希望へ」、Ⅲ期は「希望の実現に向けて」であった。Ⅲ期の「希望の実現に向けて」の中に4項目あり、私のリトルティーチャーであれば「積極的によりよい人間関係を築こうとする」の事例として出すと、この並びで事例が整理でき、分かりやすいかもしれない。

4本柱で人間関係とか情報活用、将来設計能力とやってしまうとわけが分からなくなってしまう。ならばⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期の目指す子ども像の表を示した方がよい。

事務局

キャリア教育の能力の4本柱は今まで文部科学省の資料などで説明しやすくする形で示されていたが、必ずしもキャリア教育はこの4本だけではなく、それから文部科学省もこの4本にこだわらなくなっている状況もある。流れとしてあまり4本で強く打ち出す気持ちはないという情報もあるので、練馬区としてどこを重視することでもいいと思う。

部長

基本的な考え方として文科省やいわゆる進路指導部会が研究の成果でこういうのを作って出しているが、練馬のキャッチフレーズ、キャリア教育とは自分の将来に夢や希望を抱きその実現を目指そうとする態度を育てる教育なのだということを付加しながらキャリア教育の練馬版の定義を考えた時期があったと思う。その言葉を十分に大事にしながら、羅列するのではなくⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期、各期の標語と子ども像を大きなステージにして、その中に事例を入れたほうが分かりやすい。安井先生が言われたように読み手にも何か一つのカテゴリで読んでもらえればと思う。

委員

皆さんにいろいろ持ってきていただいた事例をお話いただく中で、また別の観点が見えてくるかもしれない。

アドバイザー

そのほうがいいと思う。私の記憶では前回の根本先生の生活科の事例「がっこうだいすき」は、学校に来た子どもたちの活動をさらに発展させ、中学生の「ようこそ1年生」につなげていくという発想であった。単なる生活科の事例に終わるとははっきり言ってインパクトが足りない。

今までの学校探検が一番大きくてもせいぜい6年生で、6年生は1年生が入ってきてかわいいなで済むが、中学生はこれをどう受けとめるか。そこまで発展させて作れたらおもしろい。そうでないと9年生の小中一貫校の事例として出す意味がちょっと薄いという話が出ていた。彼女はおそらくその辺を視野に入れて前回のものを改善してくるはずである。

委員

小学校側から見るのと中学校側から見るのとの二面性がある。

アドバイザー

これは望ましい勤労観・職業観のラインに入れてあるが、そういう発想をするとむしろ人間関係や自己肯定感、自立心などの意味合いが強くなるかもしれない。この枠自体がとりあえずかぶせきれない形で出てきていますよね。

これはどっちみち変な枠で、去年1年間議論してここまでしかできなかったもので、ここで議論してもまた同じ状況に陥る。大事なことは実践してもらうことで、小中学生が何らかのかかわりを持って一貫教育を進めることが、子どもたちの学力や心の成長などいろいろな意味で大きな影響を持つというメッセージが送ればいい。文科省も揺れているようだから、われわれが揺れるのは当たり前である。最終的な枠組みは鈴木先生が考えるかもしれない。そのぐらい軽く考えないと。そういう点では事例の検討のほうがいい。

事務局

ではいったんここで小野校長先生の事例については区切りをつける。今日は高橋先生から部活動体験が出ていて、望月先生からも一つ提案があるので、なんとか残り2本できたらと思う。では高橋先生のほうから。

委員

以前出したものの順番を根本先生の前稿に従って並べ替え、直してきたにすぎない。ワークシートその他を考えたが、要は説明をして、仮入部して、本入部の届出をして、その際に安心・安全をどう保つのかということぐらいしかないもので、これといった資料が出てくるのかが心配である。

それから、本事例とキャリア教育の関連は前に書いた部分をそのまま残した。4の1、2、3とあるが、これが(1)人間関係、(2)将来設計、(3)意志決定である。それを表にしたものが、7～9年生がデモなどをやって5、6年生がそれを見る。こんなにすごいんだということから、じゃあ自分もやってみようとなる。それで実際に参加することにより、さらに7～9年生もいいモデルを示さなければいけなくと自覚を高めていく。そのようなところで5番目に、

本事例の期待される効果（１）～（４）の４点ほど挙げてみた。

裏側が指導計画である。何時間ぐらいかかるかを１コマ１コマ、オリエンテーションから始まり説明その他で３時間ぐらい。保護者への説明も行う。あとは実際に１週間体験した後、実際に本入部をして活動していく。そんなところでまだまだ中途半端である。ワークシートその他の点ではどのぐらい出せるかというところがある。

仮入部カードや、部活動のガイドラインがある。これはもとの A4 サイズを小さくしたものである。あと出てくるのはせいぜい本入部届けぐらいで、そんなものは出しても仕方ないので出さなかった。

部長

私のところにも関係してくるが、本事例の期待される効果は中学校を主体に書いているのか。

委員

はい。

部長

私のところのリトルティーチャーも同じだが、違う集団が一緒にやっているのので、８年生とか６年生など中学生側のねらいと小学生側のねらいが常に連動した原稿構成にしないと書きにくい。

委員

小学生にとってはこういう効果、中学生にとってはこうと、小野先生が書いてくれたこれが分かりやすい。

部長

ねらいもやはり二つあるのかもしれない。

委員

小学生は小学生の学習指導要領に沿ったねらいで、７～９年生は中学生のねらいでやっているわけで、そういう二面性は必ずある。一つのものに対してこっちから見るのとあちらから見るの、それぞれ必ず効果やねらいがある。

部長

このねらい【自己肯定感・自立心を育む】の（１）と（２）は中学生と小学生どちらのねらいか。

事務局

小野先生の場合はⅢ期における総合の事例なので、中学生の第８学年から見た総合のねらいが書いてあればいいと思う。しかし、これはⅡ期とⅢ期における事例ということで二つ挙げられているので、小学校のねらいと中学生のねらいの両方が書かれていないといけない。

委員

完全に右と左半分ずつ分けて作る。左が5、6年生で、3番のねらいの(1)(2)は左による。本時例の期待される効果の(1)は右よりで(2)(3)(4)は左より、そういう構成です。

部長

私のもⅢ期だけではなく、Ⅰ期とⅢ期における事例にならざるを得ない。

委員

ただA3の表では、リトルティーチャーは左側の下のほうにⅢ期の事例として出ているので、実際に指導するのは小学校低学年、Ⅰ期の子どもたちだが、小野先生はあくまでも中学2年生の立場のねらいや指導計画をはずさないようにすべきである。

高橋先生のは多分、表の自己肯定感の真ん中ぐらいに縦長のラインで収まっていて、確か下のほうの中学2、3年生はあまり文字がなかった。そこまで攻めるように作ってあげたいと思う。ねらいも今はあくまで5、6年生しかターゲットになっていないので、中学生にとってのねらいも整理できると、表の下のほうまで文章が埋まってくると思う。

部長

いま総合で学習しているのでここに位置づけしているが、キャリア教育という大きな枠組みに小中一貫という串刺しを入れて事例をもう一度考えた時に、私が1-3にこだわるのは中学校側の資料が多く、小学校の先生が見て「リトルティーチャーは、中学校の目的は分かるけど、小学校はただ授業を受けるだけじゃない」と受け取られがちである。これはバランスの問題で、小は小なりに子どもたちのねらいがある。上小は教科学習の中でこれとちょっと違う形のねらいを作っている。ここには中学生のねらいが書いてあり、実は指導案は小学校の先生が作っている、小学生がこの学習活動をする時のねらいが入っている。だから二面性を書かないとならない。

委員

その二面性を説明する手立てとしては、小学生にとって、中学生にとってというこれがいいと思う。当然ねらいの表現も工夫していかないといけないが、ただ小学生にとってはこういうねらいもあると、軽重をつける方法もある。

部長

部活の場合、小学校は来るだけで、中学校の先生が大体プランニングするのか。

委員

大体来るだけ。

委員

だから小学校から見れば、部活体験は学級活動の内容の（２）人間関係の育成などで、要するに押えとしては進路指導にかかわること、中学校生活への夢や希望を持たせるためである。これは小学校における特別活動のクラブ活動ではないですね。

委員

ただそこにもう一つ、部活と同時にやっていく際には小学校のクラブ活動の要素も入ってくる。簡単に言うと、いま小学校ではクラブ活動の時間が1コマあるが、7～9年生がやりたいものがあつた時にはその時間に中学生が行っていいことになっている。

委員

中学生が小学校のクラブ活動の場に行き指導するということか。

委員

指導するのではなく一緒に活動する。

委員

その一緒に活動というのは、例えば小学校のクラブ活動であれば4～6年の子どもたちが集まって活動計画を立て自分たちで進んでやっていく、そこに中学生が乗るのか。

委員

そう。その意味合いから先ほどの将来性、社会性プラスもともとクラブ活動が持っている要素が部活の中に入ってくる。小学校のクラブ活動と中学校の部活をどうすり合わせていくかは、いま実際に教育委員会に問い合わせをしている。

事務局

この件はまだ結論が出ていないと思うが、教育課程上の扱いが小中で違うことと、あと特別活動として小学校がやっているのは教育課程内なので、誰が指導していくのかという指導者の問題などさまざまある。それをこの報告書の中でキャリア教育の事例として挙げる時には注意深くやらないといけない。もし、その辺で強く出すとしたら、小学校の特別活動の視点でグーッと出すのも一つの方法かと思う。小学校側の資料をいろいろ集めるのも役に立つ気がする。

部長

ここに書いてある実践例は、今おっしゃった小学校の教育課程外の活動として出ている。小学校は学級活動及び教育課程外の時間という形で、「教育課程外の時間」という言葉がここに出ている。中学では通称「部活動」の名前を使っているが、教育課程にかかわる用語では教育課程外の活動になり、そうすると小も中も同じである。位置づけはそれしかないのではないか。教育活動だけでも、小学校も中学校も学級活動や特別活動と入れないで教育課程外の時間としてしまえば、共通の土壌にはなる。でも小学校は入ってしまうのか。

委員

小学校は時数でカウントする部分がある。学級活動の内容（２）に、それにかかわるものがある。要するに中学校生活に憧れを持つとか、人間関係の形成とかそういう内容が学級活動の（２）の中にあり、それでカウントしようと思えばできる。

部長

それが今回の場合は、中学校で言う部活動のような活動だったと。

委員

中学校に進学した時の中１プロブレム解消の一つの手立てとしてはありえる。

部長

クラブ活動とは違いますよね。

委員

ここはもう少し現６年生と１年生に体験で何を期待してきたか聞き取りをし、中学校側から見た文と小学校側から見た文が併記されるよう工夫してみる。いま小中一貫でいろいろ検討している中で、小学校の先生から一貫教育は小学校の教育活動にとってはメリットがないねとの声が上がっている。つまり今まで小学校がある程度作ってきたものに、中学校がこういうものをやりたい、こういうものがあるよとどんどん入り込み、小学校の活動が制限されている。だからメリットがないとまで言い切る先生もいる。

例えば先ほどのリトルティーチャーは確かにいいのかもしれないが、時間が有用だったと思うのは、やったほうの側で、小学校はその場を提供しただけという考え方も成り立つ。どちらにとってもプラスになると思うのが、小学校からすれば今までやってきたものに中学校の見方を押し付けられて、何か面白くないという意見も出ている。

委員

そうすると、小学校にとってのメリットをここに明記するのは大事ですね。

部長

特にキャリア教育の場合は必要である。私も今年３年目で、リトルティーチャーで小学校の先生と結構しゃべるので「小学校は何かメリットある？」と毎回聞いている。小学校の先生自体としてはやはり育ちが見られるのがすごく楽しいそうである。あんなにやんちゃな子どもが成長し、一生懸命に汗だくになってこれだけやる、あれが育ちだろうと。

それと同時に、やはり小学生はどうしても仲間関係がわりと小さく、ある意味異学年とのかかわりが薄くなっているから、そういう意味では効果がある。そう言ってくれるから続いている。そこは難しいが、小学校でいやだと言われたらもうできない。

委員

今のはどちらかというと、小学校を出て中学生になった子たちはこんなふうになっているの

か、そうすると今の子たちもああいうふうになっていくのかなというところを先生が見られるというメリットですよね。ではそれが今いる子どもたちにとって直接どんなメリットがあるかというところか。その辺、最近いろいろやっていて非常に難しい視点だなと思い始めている。

部長

本当はこういう事例をやった時に、実践をやった群とやらない群、統制群と実験群である程度、教育効果ではないが優位の差が出るとか出ないとか、そこまではいかななくても直感的に小学校側としてもこういうのはいいというのをあえて出さないと、小学校が引いてしまう可能性がある。

委員

うまく紙面構成してアピールしていかないと、この資料を活用してもらえなくなるかもしれない。

事務局

そうすると、事例を担当する方々は、最終的に全体を眺めて変えていくかもしれないが、小中それぞれの期待される効果やねらいなどを併記するというところでよいか。

いま3ページだが、これを4ページから6ページにできるか。

委員

今のようなところを紙面構成でⅡ期・Ⅲ期に分けて表にしていけば、それでも3ページだと思う。4にすると中身が必要になる。

部長

例えば先生のところで、典型的な部活を一緒にやっている具体的な部活動を二つ三つ挙げると何ががあるか。

委員

今年一番希望が多かったのは野球である。中学校の部員よりも多い。あとはテニスが多い。

委員

何か地域の青少年育成事業にかかわっているような部活はないのか。うちの音楽部は青少年の音楽祭などにかかわっていて、小学生と中学生が同じ舞台でやっている。あるいは育成のウォークラリーなどに部活で参加していないのか。

委員

今年から吹奏楽が出る予定でいる。

委員

新聞部が外へ出てウォークラリーの審判などをやっている。何かそういった小学生がかかわ

る外の事業を目標にしている部活はないのか。

委員

いま言った吹奏楽が今年から外へ出ていくだけである。昨年までは中だけでやっていた。

委員

慰問とか。やっていなくても作ってしまえばいい。

委員

いま小学生が来て実際にそういう動きで活動している。

部長

顧問の先生は中学校だけか。小学校も？

委員

今のところは中学校だけ。先ほど言ったように小学校のクラブに中学生が行くこともあるので、小中一貫にした時には小学校の先生に顧問をしてもらってもいいだろうという話になっている。現段階では小学校の先生が顧問に入っているものはない。一緒にやるのはある。とにかく事例を考えてみる。

事務局

それでは続いて望月先生のお話に移りたいと思う。

委員

私が昨年度分担したのは、支援学級の子たちもキャリア教育として就労に関する学習をしているとか、そういう学習をしながらコミュニケーション能力をつけていくというものだった。今回、小中一貫の原稿を仕上げるためにどうしようかと考え、途中で終わってしまった状態のものを今日は提示した。

支援学級のカリキュラムが小中一貫教育の中で使えるとアピールし、本学級の教育目標としては生活自立、社会自立を打ち出して、それがコミュニケーション能力の向上につながっていることを強調した。このコミュニケーション能力を向上させるには交流学习がいいのではないかと提案を投げかけておき、大きな2の交流学习の事例のところで、小集団で基礎的なものを作り、中ぐらいの集団の中で実践と経験をさせて、大集団の社会に生かしていければというふうに記述した。

これから指導案を作るとしたら、交流給食、それから行事における交流、地域との交流、デイサービスセンターとの交流の辺りでどれかを選び、明記できればと思う。(1)(2)と振ったが、どちらかというとなら行事における交流活動をするための手段として交流給食をやっている、その辺はちょっと形を変えようかと思っている。(1)(2)が(3)(4)につながる流れである。

私は中学校担当だが、うちに来ている支援学級の中学生は7～8歳、小学校の3、4年生レ

ベルの子たちなので、通常学級の中の小中一貫とちょうど合うのではないかと思い、このように提案した。小学校2、3年生が中学校に給食を食べにいくとか、リトルティーチャーのような感じになるのか、逆に、中学生がいくつかのグループに分かれて学級にお邪魔して班に入り食べたりする。

食べることについては勉強と違って特にそんなに年齢差を考慮しなくてもいいこともあり、取り組みやすいと思い、交流給食の事例を挙げてみた。

運動会や校外学習は通常の学級に入れて活動させているが、いきなりそういう行事のためにクラスに行っても萎縮してしまうので、2週間ぐらい前から交流給食で支援学級の子たちが交流しているクラスに行き、一緒に食事する中で通常学級の雰囲気はこうだとか、こういう子がいるんだなというのを学び、それで運動会の時には一緒にリレーをするからね、一緒に競技するからねという方向につなげていく。だから、小中一貫でもそういう行事の前に交流給食をやることによってつながりができるのではないか。

あと、逆に支援学級の中に各クラス1グループぐらい、5～6人ぐらいの子どもたちを招待して食べるやり方もある。だから、交流給食では支援学級から行くパターンと、支援学級に来てもらうパターンの2パターンを用意し、それぞれ効果と目的を変えている。先ほどあったように、行く側と来る側の目的やねらいは違うので、それは明確にしている。その辺を書いていけば、ワークシートや写真も含めて4ページぐらいの構成になると思う。そういう方向でいいのかご意見いただければと思う。

委員

例えば(1)の交流給食や(2)の行事における交流は要するに同じ学年の通常学級との交流なのか。

委員

同じ学年の交流である。本校の支援学級は2学級あるが、人数が少ないので1年生から3年生まで同じスペースで生活している。交流活動については、支援学級の1年生は通常学級の1年生のどこかのクラスに所属している。

委員

これまでほかの一貫校で上の学年と下の学年というのがあったが、例えば特別支援学級の8、9年生と通常学級の1～4年生の交流は成り立つのか。

委員

中学生のクラスの中に小学生がポーンと入ってきてどうなるかなというのがあがるが、リトルティーチャーの話を聞いたり、生活をしていく中で関係を持つことを考えると、小学校2、3年生であれば、ちょっとスペース的な問題もあるが、中学生のクラスに行き給食を食べて帰るぐらいはできるかと思う。中学生も小さい子どもたちが来てちょこちょこ面倒をみて教室へ帰すことはできる。

委員

あと子どもの実態にもよるが、小学校の特別支援学級の子どもたちとの縦の交流は、いま私が申し上げたものよりも可能性は高いのか。

委員

支援学級の子ども同士はやったことがない。支援学級の小中では、教員同士の情報交換はあるが、子どもたちを交流させている場面はなかなかない。

委員

今は同学年で交流の話だったので、話を聞きながら一貫校の中のキャリア教育にはそういう視点が必要なかなと思った。

事務局

いま石井校長先生の話にあったように、キャリア教育の視点、小中一貫の交流の部分にどういう形があるかという辺りをちょっと膨らませ、あと前回と今回で確認してだんだん固まってきた原稿の項目に落とし込んで望月先生にある程度形を作っていたら、次回提出いただくということでしょうか。

委員

去年の「中間報告書」の望月先生の職業観・勤労観がすごくよかった。支援学級の第Ⅲ期に相当するのだと思うが、コンピュータの使い方やビジネス文書の作成などの例があってすごく夢のある内容でいいなと感じていた。だが、交流給食という視点になった時に「希望の実現に向けて」という職業観・勤労観からちょっと離れてきていて、むしろ自己肯定感の「夢や希望」の第Ⅱ期に相当する内容なのかなと感じている。前回いかなかったのでよく分からないのだが、事例6とはもう離れてしまっているのか。

委員

小中一貫を考え、またワークシートなどを使えるものにしてしようと考えた時に、ちょっと行き詰まってしまった。それで、じゃあ一貫でできることは何か、今うちの学級でやっていることで通常学級でも真似できるものはないかと思い、これはどうかと思って書いた。

委員

私もそう。「働くってなあに」では、小中一貫よりキャリアに視点を置いて9年間をこういう並べ方をしていくとこういう形で収まるねというスタンスだった。それが、今ここにきて小中一貫を色濃く出して、例えばⅠ期とⅢ期の子たちをセットにして相互でやっという形に変えていくには、これを根本的に変える必要がある気がする。

このままこれを踏襲しつつ、こっちにもっていきこうとするとどうしても無理がある。だから、私もずっと出せずにいた。それが一つと、特別支援学級が9年間あるという仮定で計画を立てるのか。例えば小中が連携し、小学校の特別支援学級はあるけれども、7～9年生の通常学級の子はいるというシチュエーションでもいいのか、石井先生からも話があったが、その逆があ

ってもいいのか。7～9年生の特別支援学級はあるけれども1～6の通常学級の子はいるというシチュエーションだけなのか。

そこがⅠ期・Ⅲ期のセットだと、やはり考えられるのは今話があった形の交流だけになる。そうではなくて、特別支援学級が1年生～9年生までいるというシチュエーションを見越した計画を立てるのであれば、少し変わってくるかと思う。それでいうと、ここにある文化発表会で、Ⅰ期の子どもたちが7年生、8年生、9年生になるとああなるのかと憧れる形の計画は作ることができる。

委員

小中一貫の視点で見直すと難しいと改めて思った。確かに飯塚先生が言うように、事例の5、6はキャリア教育という観点でとりあえず出してもらった。

事務局

桜小中が選ばれる前は、もともといくつか隣接校をくっつけようという考えで選定していた。そう考えると、もしかしたら将来的に特別支援学級を持っている小と中が小中一貫校になる可能性もゼロではない。その辺を加味して、小にも中にもある前提で作ってもらった方が夢があると思う。

そうでなければ、例えば望月先生の書き方であれば小にはないけど中にはある学校も練馬の場合ありますよね。そういう学校が小中一貫になった時の事例という断り書きがあるかもしれない。そう考えないと作りにくいのではないかな。

部長

はっきり言って通常の学級だって小中交流はそんなにない。やっているほうが少ないのだから、固定学級であろうがなかろうが、普通級であろうがなかろうが、置かれている立場は同じだと思う。そんなに事例は挙がらない。

アドバイザー

支援学級同士の交流と、支援学級と普通学級の交流は、効果も含めてどちらがいいのか。特別支援学級9年の幅で交流を考えるのは、現実にはなかなか難しいのではないかな。特別支援学級をキャリアに入れた背景は、キャリア教育的な視点とか、あるいは子どもたちが自分のところだけにおいて交流が足りないからもうちょっと外に出していかないと本当の成長はないのではないかなという発想だった気がする。だから、何段階も飛んで出そうとしなくてもいいのかなと思う。現実にこれならやれるぞという、キャリア教育的な視点でいいような気がする。

委員

地域交流のような柱が一つあるといいのだが。

委員

現実にそういう実践がほとんどないとすれば架空のものになってしまう。

アドバイザー

2段階か3段階ぐらい飛ぶ感じがする。そうすると机上のプランになり、見て「よし、やってみよう」となるかどうか。

部長

やはりキャリア教育の視点での交流学习のほうが実現性は高い。小中一貫と縛りをかけてしまうとハードルが高いし、提案を見て「あ、うちではできない」となってしまうかもしれない。それに勝る本当に素晴らしい目標と教育効果が見えていけばいいのだが、今の話を聞いていてもまだそこまでは至っていない。その前にやれる同一中学校内、同一小学校内の交流学习があれば、提案してしまったほうが分かりやすい。

アドバイザー

望月先生や飯塚先生が、一生懸命に特別支援教育に取り組まれているのをもっとほかにも広げるといふ発想がまず第一かと思う。キャリアのカリキュラムが一番入れやすいのでここにそれを入れたのだから、まずもう一度ベースに戻ったほうがいい気がする。

いろいろな職業に触れ、人とのかかわりを広げて子どもたちが自立していく。今まで以上に自立性の高い教育を提供することを考えてキャリア教育の中に入れた。それでいいような気がする。もちろん、小中学校の連携や交流が考えられればいいのだが。私の発想では、通常学級の中学生と飯塚さんのクラスの子が交流するのであれば分かる。そのほうがやりやすいですね。

委員

そうですね。そうすると、例えば障害理解教育のような形で、うちの学校でもやりたいと思っているが、通常級の子たちは自分と異なる他者に対してどういう理解をするのか、どういう接し方をするのかなども含めて交流し、うちの子どもたちは第三者に自分が持っている力を発揮しようとする。そういう形の交流は双方にねらいがあるし、できると思う。

アドバイザー

それでも3段階ぐらい飛んでいる感じがする。交流で出すならばまず通常学級との交流がいいし、それも難しければ去年検討してきたあのベースでいいような気がする。特別支援学級にいる子どもたちがより自立できるようなプログラムを作って、区のほかの学校の人たちに広める。ここで検討するにはそういう意味合いがあると思う。

1人で悩んで閉じこもり、毎日子どもと格闘している特別支援の先生がいっぱいいる。もちろん先生同士もいろいろあると思うが、最終的には9年目の中学3年が出ていった次の段階の子どもたちに何らかのたくましが備わっていることが重要であると思う。多少なりとも1人でできる部分が多くなってくる。それを願っているはずである。

委員

あまり幅を広げないほうがいいかもしれませんね。

部長

行事での交流の中で、例えば全校でできるクリーン活動とかエコキャップ活動、美術展示会は同一校でもできる。それから小中の移動美術展示会もやろうと思えばできる。でも、中には一緒に行動するわけではないけれども、同一の目標に向かってそれぞれ活動したものを集約してある結果になるというものもある。そう意味では、小中一貫であろうがなかろうが、異学年や違う学校でも行事において交流する余地はある。

生徒会と児童会、あるいは特別支援学級で活動している子どもたちと一緒にやって何かの目標を達成するなど、同じ場所で同じことをしなくてもできるものはないか。確かに難しいが、もう少し発想を変えると、共同学習ではないが、同じテーマでそれぞればらばらに自主的にやっているけれども、総合的に見て、みんなで何かできるものはないか。

委員

今やっている連合図工展は、各小学校が全部出しているところに特別支援学級が13校出している。中学校は、練馬区が広いからなのか、いろいろあるからなのかわからないが、小中の接点はなかなか難しい。その辺のつながりができるようになるともっとおもしろいと思う。

委員

とりあえず特別支援学級については、去年まとめたキャリア教育の視点で進めていくことを確認できればいいのではないか。

事務局

望月先生と飯塚先生が今後、事例をまとめていくうえで、疑問点が少し解決できていけば次の準備がしやすいと思う。

アドバイザー

私が勝手に言って申し訳ないが、事例によっては小中一貫校における効果の項目はなくてもいい、「小中一貫教育における」をカットした「本時例の効果」でいい。

小中一貫教育があるから引かかるのだと思う。ひょっとしたら事例によって項目が変わるぐらいのほうがいいのかもしれない。

部長

そのほうが読み手は自然ですよ。無理していると感じ取られると読まれない。

アドバイザー

キャリア教育部会だからキャリア教育という冠ははずせないが、小中一貫教育では書けない事例があっても仕方ないのではないか。

野田先生原稿は出ていないが、例えば野田先生が職場体験の事例を出す時に、キャリア教育は書けるが、小中一貫の効果の項目が書けるかどうか同じ課題がある。根本先生は前回、原稿を書いてきているが、従来型ではそれが書きにくく、それで中学生が子どもたちを迎えるのを入れると一貫の意味が書けるようになるのではと前回話をした。だから、事例によ

っては必ずしも全部に交流はない。あるいは一貫が出ないものもある。職場体験は出るでしょうか。出ないけれどもキャリア教育としては重要であると思う。

委員

ただ小学校や幼稚園へ行ったり、保育実習へ行ったりする。

部長

要するにリトルティーチャーのような感じ。

アドバイザー

でも職場体験で小学校へ行くのは小中一貫とは言わないと思う。

事務局

苦しいところは無理して作らないで、それぞれできるところまでを出し、あとは全体を眺めて調整する感じかと思う。根本先生がいらっしゃって原稿を用意されているようなので、せっかくですから時間もう少しいただきたいと思う。

委員

今の廣嶋先生の指導が十分反映されていないのもう一回直してこようと思うが、指導計画の時にこれを見てできるような形でおっしゃったのが心に残っており、少し精査して時間数を入れたり、諸単元の目標を入れたりしてきた。今日、皆様のものを拝見しながらまた直していきたいと思う。

あと、作ってからカード類は半ページではなく1ページ使うことになったことを思い出したが、間に合わないのでこのまま持ってきた。また、下にカードの使い方を入れた。実際にこういうふうに使えば、こういう利点があることを入れれば使ってもらえるカードになるかなと思い、少し文を整えた。中学校のところはやはりよく分かっていないのであまり書けず、その辺りはこの次お話をいただきながら直していきたい。

事務局

また次回にでも検討の時間を取ればと思う。本日はここまでにしたと思う。では廣嶋先生、最後に一言。

アドバイザー

個人的な感想になるが、このリトルティーチャーの事例を一番先に整理したほうがいいのかと思う。どこでもできる事例でなければ意味がない。生活科の事例はやれそうがいい。いろいろ出てきてイメージがわくようになってきたので、先が期待できる。あまりキャリア教育との関係とか、小中一貫をどういうふうに位置づけるかなどと理屈で迫っているとなかなか進まないもので、いいやり方かどうかは分からないが、理屈は後でどうにでもつけられるという開き直りもある。要するに1枚目ですよね。原稿を4枚書くとすると1枚目が一番書きにくいので、とにかくそれぞれがいいと思う事例を2枚目からでもいいから書いていく。1枚目はキーワード

などを入れて箇条書き程度にして、それをみんなでもう一回整理するぐらいのつमりのほうが手っ取り早い気がする。そういう点では、特に今日のリトルティーチャーの事例は、例えばこれを練馬区全体でやっただけでもインパクトがあると思う。

子どもは間違いなく変わる。実際に変わってきた例の報告が出ている。小中一貫教育校でも、あるいは一貫校でないところでも、何かそういう連携教育の可能性を感じる。教育はやはり理屈より実践だなと。担当の先生方はそれぞれ大変でしょうが、ぜひ次回またイメージがわく形で提案いただけると大変ありがたい。

事務局

小野校長先生、最後に何か一言。

委員

もっとビシビシ言ってもらえればよかった。ただ私はまだ3年目だが、岡田校長から引き継いで、リトルティーチャーなど全く分からずに見たと今とではちょっと違う。何が違うかというと、写真の撮り方が全く違う。最初は記録を残してバタバタやっていたが、今は子どもがある子どもとどうかかわりながら、どの学びがあるか、校長なのでその辺まで探りたいと思っている。同じことをやっているけれどもこちらが変わってきた。

このキャリア教育も去年やった事例が今年で2年目になる。見方が変わってもいいと思う。同じことをやっているわけではなく、深まってきている。これからは同校の小中一貫もそうだし、私はずっと障害学級の子もたちを17年見ているが、ここは絶対にはずせない。ステータジが違ったとしてもやはりきちんと出していかないといけない気がしている。

事務局

最後、次回は7月13日火曜日の3時から本庁舎12階の教育委員会室、そしてその次が7月28日水曜日10時から大泉学園桜中学校で開催する。